

異文化を畏敬し活動する現場から アフガニスタン人道支援における中村哲医師の信念と発信

清水展（関西大学政策創造学部特任教授・京都大学名誉教授）

1. ベトナムとアフガニスタン

2019年12月4日、中村哲医師は灌漑用水路の工事現場に向かう途中、助手席に乗っていたジープがアフガニスタン東部ジャラバードの街角で待ち伏せ攻撃を受け凶弾に倒れた。その衝撃的なニュースは新聞やテレビ、雑誌などで大きく報道された。そして2021年9月末にアメリカ軍はアフガニスタンから全面的に撤退した。2001年の9.11同時テロに対する報復爆撃に始まるアメリカの介入は完全に失敗に終わった。オバマ政権時代（2009～2017）に派兵軍の増強が進み、いつとき2011、12年には10万人ほどに兵を増派して軍事的な制圧を試みた。しかし結局は失敗した。

歴史を振り返ると、アフガニスタンへの西欧の大国の軍事侵攻という企ては常に頓挫し、大きな痛手を負ってきた。大英帝国は第三次アフガン戦争（1919年）に敗れ、ソビエトは10年間の軍事介入（1979年～1989年）によって国力を消耗し共産党政権とソ連邦の崩壊へと至った。「帝国の墓場」とも俗称されるアフガニスタンにアメリカもまた足をすくわれたと言える。アフガニスタンの反政府武装勢力タリバーンは、2021年8月15日に首都カブールへと進攻し大統領府を掌握して暫定政権を樹立した。ガニ大統領はその前に国外に退避し、政権は事実上崩壊していた。そして8月31日にはアメリカ軍もアフガンから完全撤退した。

撤退の日、カブール空港から飛び立つ飛行機に乗ろうと殺到するアフガニスタンの人々のニュース映像は、1975年にアメリカ軍がサイゴンから撤退する日の情景を私に思い起こさせた。半世紀近くを経た後にデジャ・ヴつまり強烈な既視感覚を覚えた。ベトナム戦争は、1964年7～8月のトンキン湾事件を機に議会からベトナム問題解決のための特別権限を得たジョンソン大統領が、翌65年2月

にB-52による北ベトナム爆撃（北爆）を開始して以降、米軍の介入が本格化していった。67年末までには派遣兵力は50万を超え、加えて韓国ほかの参戦国から5万の兵力が派遣された。それでもベトナム戦争に勝てなかった。その轍をアフガンで再び繰り返したことになる。

2001年9月11日の同時多発テロの衝撃にアメリカはただちに反応し、首謀者のオサマ・ビン・ラディン容疑者の早期の引き渡しをタリバーン政府に求めた。それを拒まれたことから、タリバーン政権の打倒を目指した軍事作戦を翌月10月7日に開始した。背景には、アメリカ本土しかも経済の心臓部に当たるニューヨーク・マンハッタン島のツイン・タワー・ビルを攻撃され破壊されたことの衝撃や恐怖や怒りという市民感情があった。テロの翌日にブッシュ大統領が「テロとの戦い」を宣言し、イギリス・フランス・カナダ・ドイツなどと有志連合を形成し、共同でアフガニスタン攻撃の準備を進めた。侵攻はミサイル攻撃と空爆から始まり、地上では北部地域を支配する地方軍閥（民族政治集団）の連合勢力を支援してカブール侵攻を後押しし、11月13日には北部同盟軍が首都を制圧した。

そもそもタリバーン政府は地方ごとに異なる部族のゆるやかな連合体の性格を有しており、辺境の山岳地帯に身を潜め地域の有力者に庇護されているビン・ラディンの所在を探索して身柄を確保することは難しかった。同時多発テロからはほぼ10年後の2011年5月2日の深夜に、米海軍特殊部隊（SEALS）の隊員が2機のヘリコプターに分乗してパキスタンの首都イスラマバード近郊の地方都市アボッターバードにある邸宅を急襲し、そこに潜んで暮らしていたビン・ラディン容疑者を殺害した。後知恵になるが、その作戦の成功によって当初のアフガン侵攻の目的（テロの首謀者の逮捕や排除）を

達成したことになり、米軍が撤退をする転機や名分となりえた。しかし米軍はその後もなお10年にわたって戦後復興と平和構築の大義を掲げアフガニスタンでの駐留と戦闘を続けた。

2. 草の根の人道支援

あらためて振り返ると、アメリカの侵攻が始まった2001年は、地球温暖化がもたらす干ばつにアフガニスタンが苦しんでいた時期であった。そんな時、地上での干ばつに加えて空からは大量の爆弾が雨粒の代わりに落とされたのである。干ばつと空爆の二重苦によってアフガニスタンの地方の庶民が生存の危機に直面したとき、中村医師は彼らがその冬を生き延びて越せるよう食料支援（小麦粉と食用油の購入、トラックによる地方配送と分配）を始めた（中村 2004）。そもそも中村は医者であり、主にらい病患者を治療するためにアフガニスタンに1984年に派遣された。

しかし干ばつの影響が深刻になり始めてからは、現地の人々が生きてゆくために必要とする医療の提供にとどまらず、何よりもまず彼らが自分たちの土地で生き延びてゆくための生存基盤の整備、すなわち井戸掘り（中村 2001）や用水路建設（中村 2006b）などへと重点プロジェクトを変えていった。それまでも現地との喫緊の課題やニーズに応じて、中村の仕事は医師からサンダル工場の親方、病院の院長、僻地医療の診療所運営者、空爆下での食糧配布の手配師、さらには井戸掘り技師、そして用水路建設の土建屋の社長兼現場監督へと、それぞれ目まぐるしく変わっていた。そのときどき必要とされる知識と技術を現場で習得し、悪戦苦闘しながら、しかし端から見れば軽やかに（医者としての地位や役割に固執せず、また尊大にもならないという意味で）自身の天職を変えていった。まさに七変化である。そうしたなかで一

買しているのは、現地の人々を主とし、自らを従として、彼らの真の必要を第一と考えて行動する姿勢であった。

中村の活動は、ふたつの側面に分けられる。ひとつは、ペシャワールを拠点としてパキスタン北西部とアフガニスタン東北部の病者、貧者、弱者、農民の生活と生存のためのさまざまな支援活動である。もうひとつは活動を支える日本のペシャワール会の会員らへの説明責任として年に4回発行する『会報』に報告を載せることや、講演、新聞雑誌の記事、著書などをとおして、アフガニスタンの現状を正しく伝えることである。

中村は、福岡の西南学院中学に在学中にキリスト教の洗礼を受け、教会関係をとおしてパキスタン北西辺境州のペシャワール・ミッション病院に赴任した。ただし彼は現地でキリスト教の宣教等の活動は一切しなかった。教会を建てることもなかった。そして活動の当初から資金面で彼を支え続けてきたのが福岡に事務所を置くペシャワール会であった¹。

中村がペシャワールへ派遣されるのが決まってすぐの1983年9月に発足して以来、2001年の9.11テロ事件を切っかけとして会の知名度と支援が「全国区」に拡大した後も、ペシャワール会の『中村哲ファンクラブ』という性格は今日に至るまで変わっていない²。そして現地ことは中村が一番詳しく、彼の活動理念に賛同した者の集まりがペシャワール会なので、中村の活動方針をそのまま会の方針としてきたという。すなわちそれは「三無主義」²であり、加えて「誰も行かない所へ行く」「現地と同じ目の高さで支援する」といった、「徹底した現地主義を買って参りました」という（ペシャワール会事務局編 2004：33-34）。

3. 弱者の傍らに身を寄せて

縁あってペシャワールに赴任していった中村の報告で、私がもっとも強い衝撃

と感銘を受けたのは、赴任して早々1985年のクリスマスのエピソードである。おそらく、それが中村の原点であり、それ以後の著作でも繰り返し触れられ、2006年のNHK番組でも語っている（中村 2006b：38-39）。それはらいで全身に潰瘍化した膿疱があり、喉頭浮腫のためにしばしば呼吸困難と肺炎に陥ったハリマという若い女性患者のことである。生きるために最終的に気管支切開を行ったが、それで呼吸は楽になったものの、同時にそれはまともな社会復帰が困難になったことを意味していた。

そうして生きながらえさせるのが、ハリマにとって幸せだったかどうかを確信できず、中村は思い悩んでいた。ソ連軍の侵攻に反撃するタリバーンの戦争は激化の一途をたどっており、その当時のアフガニスタンとペシャワールの状況は、あまりに絶望的であった。「人間」に関する一切の楽天的な確信を、ほとんど信じられないものにしていたという。そして「自分もまた、患者たちと共にうらえ、汚泥にまみれて生きてゆく、ただの卑しい人間の一人にすぎなかった。ただひとつ確信できたのは、…ドクター・サーブと尊敬されていても、泣き叫ぶハリマとまったく同じ平面にあるという事実だけであった」ことを痛感する。そして次のように報告する。

この1985年の暗いクリスマスを私は一生涯忘れることができない。ソ連軍はペシャワール近郊のカイバル峠にせまっていた。峠のてっぺんでは激戦が展開され、負傷者を乗せた車が連日連夜、市内の各病院と峠を往復していた。…

当時所属していた或る海外医療協力団体からは、はるか離れた国外で行われる「重要会議」に出席するよう矢の催促が来ていた。「発展途上国の現実に立脚して海外ワーカーとしての体験を

分かち合い、アジアの草の根の人々とともに生きる者として…。美しい自然と人々に囲まれたアジアの山村で語らいの時を…」

白々しい文句だと思った。美しく飾られた言葉より、天を仰いで叫ぶハリマの自暴自棄の方が真実だった。この非常時に2週間以上も置き去りにする訳にはいかなかった。…無駄口と議論はもうたくさんだ。最後通牒のような「出席要請」を力を込めて引き裂いた。私は、催しものと議論ずくめの割に中身のない「海外医療協力」と、この時決別したのである。

クリスマスの日、ペシャワールでいちばん上等のケーキをヤケになって大量に買い込み、入院患者全員に配った。（中村 1993：95-96）

中村は洗礼を受けたキリスト者でありながら、派遣元の団体からの会議参加の強い要請にもかかわらず、目の前で病に痛み苦しむ患者を置いて病院を離れることができなかった。そのような中村は、福岡に生まれ育ち自分が九州人であることを強く意識している。東京へゆくために初めて関門海峡を渡ったのは30歳を過ぎてからで、東京よりも先にパキスタンに出かけていた。それは1978年6月に福岡登高会のヒンズークッシュ遠征隊に参加した時であった。蝶々と山登りが好きで遠征隊に加わり、実際に訪れて現地への愛着を抱いたものの、医師として赴任することになるとは思いもしなかったという。それから4年後にとんとん拍子で派遣が決まったのは、多少は現地の事情を知っていたこともあり、「ある種の義侠心に駆られ、『まんざら知らぬ土地ではありませんから』と、半ば気軽に引き受けた」からという（中村 1999：22）。

また「なぜそこまで村人に、貧しい民に、尽くすのだろうか」かと尋ねられたときには、「これは九州人の特質かも知れま

¹ ペシャワール会はボランティアで運営され、事務所も篤志家から安価な家賃で提供されているために、予算の90%以上が現地での実際の活動費に充てられた。国際的に名高いNGOでも予算の半分ほどは人件費や家賃、光熱費、通信費などに用いられており、ペシャワール会の内容の濃い現地活動は特筆に値する。

² 「無思想・無節操・無駄」のことであり、それは初めは半ば自虐的に冗談半分で述べたものが、日本での議論よりも現地での活動を主とする会の方針に合致し案外と核心に触れていることに気づいたために、繰り返し唱えるようになったという。

せんが、そうせんと気が済まん、落ち着かん、という気持ちが一番でした」と答えている。続いて、「自分は古い人間」だから、「約束は、必ず守らなければならないと考える」とも言っている（中村 1999：78）。あるいは「自分は、『日本の九州島』という限られた地域、それも限られた時代で身につけた伝統や精神的気流から自由ではなかった。その枠内でしか、是非善悪、美醜の感覚を保持できなかった」とも語っている（中村 1999：346）。

そうした中村の昔気質は両親から、そして母方の祖母から受け継いだものであり、とりわけ物心ついてからの躾と教育によるところが大きい。中村自身が、ミッション・スクールの西南学院中学部でキリスト教（とりわけ内村鑑三）と出会うまでの倫理観の骨髄を作ったのは、父親と祖母の威厳であったと述懐している。ふたりとも逆らうことのできない恐ろしい精神的権威であり、外面的な思想の上着は別として、ともに頑固一徹で「曲がったことは許せん」という儒教的・日本的な道徳観に拘束されていた。中村自身もまた、『論語』が人の当然に守るべきルールを説くものとして身についたという（中村 2006b：68）。

中村の父親は、ロシア革命に触発され、戦前は社会主義の筋金入りの闘士で非合法活動を指導し、戦中には反戦運動をして逮捕実刑を受け、日本の国難に直面して転向を余儀なくされた経歴の持ち主である。戦後は事業にも失敗して鬱々たる思いを秘めて生きたという。自身の過去を中村に語ることはほとんどなかったというが、中村が子供の頃から耳にタコができるほど父親から繰り返し聞かされたのは、「早く大きくなって、日本の役に立つ人間になれ、お前は親を捨ててもいい。世の中のためになる人間になれ」という教えであった（中村 1993：252）。関係者によれば「頑固一徹、リベラリストにして国粋主義者、何より敗戦国日本が、軽薄な西洋文明に毒されて行く時代の変

化に唾棄すべき屈辱感を感じていた知識人だった」。そうした父親だからか、「アメ公の配るチョコなど、絶対に口にすんな」と子供たちを厳しく戒めていた（中村 1993：269）。さらには、「進駐軍は日本人を歌とスポーツで骨抜きにする」と固く信じて、ラジオでジャズなどが流れると怖い顔をしてプツリとスイッチを切ってしまったという。

4. 異文化を尊重する現場主義者

先に述べたように9.11同時多発テロの前、アフガニスタンは地球温暖化の影響でヒンドークシュ山脈の降雪量が減り、その雪解け水を源流とするクナール川の水量が激減し、アフガニスタン東部は農業用水や飲料水が不足する干ばつ被害が深刻となっていた。それに対して中村は2000年から水源確保事業を始めて1,600本の井戸を掘り、30ヶ所以上のカーレーズ（地下用水路）を修復した。2003年からは自ら設計図を書き、ブルドーザーやユンボを運転して干ばつのために荒地や砂漠化した土地を農地として復興させるための灌漑用水路の建設に専心してきた。

2010年に完成したマルワリード用水路（標高差17.2メートル、平均斜度約0.0007度）の全長は25キロメートル、推定灌漑可能面積は約3,000ヘクタールに達した。その後2011年に始まったJICAとの共同事業による用水路の拡張整備と新たな堰の建設によって、シェイワ、ベスード、カマの3郡の総計で灌漑耕地面積は総計16,500ヘクタールに広がり、帰農した難民は家族も含め65万人に達すると推計される（中村 2017：152-160）。

ペシャワール会と中村の活動で特筆に値するのは、会の発足以来、年に4回の会報冊子を発行し、アメリカの侵攻後も続ける灌漑事業の進展と、その工事現場で起きたこと、見たこと聞いたことを報告し続けたことである。それは、ワシントン発、東京経由で大量に流される新聞

やテレビの報道とは異なる現地の状況と、住民たちの生活や社会の実態を、時に義憤を込めて詳しく報告するものであった。また折々に求められれば、読売、朝日、毎日の三大紙をはじめ週刊誌や総合雑誌などに積極的に寄稿した。早くは2001年10月13日に、衆院テロ対策特別委員会に参考人として招かれ、自衛隊派遣は「有害無益」と言い切っている³。

中村の現場での活動とそこでの見聞や実体験にもとづく発言は、日本や世界の「常識」とは大きく異なることが多々ある。たとえば9.11同時多発テロの半年ほど前の2001年3月にタリバーンがバーミヤン石窟の仏像を爆破した「蛮行」に対して、国際世論は厳しく糾弾した。その時、中村はたまたまバーミヤンにいた。現場からの報告によると、彼が訪れたのは巨大石仏の破壊が半分終わったところで、散発的な戦闘が続いていた。タリバーン兵士とハザラの軍民だけがいる状態で大方の村落はもぬけの殻、大部分の住民はカプールの親族を頼って逃げ出した後だった。

既に前年夏の段階で、国連機関は「千万人が被災、予想される餓死者百万人」と、世界に警告を発していた。中村はバーミヤン石窟の仏像爆破の跡に立ち、そこで抱いた卒直な思いを「[本当は誰が私を壊すのか]：バーミヤン・大仏の現場で」と題して朝日新聞に投書し掲載された。

抜けるような紺碧の空とまばゆい雪の峰に囲まれるバーミヤン盆地は、不気味なほど静かだった。無数の石窟中で、ひときわ大きく、右半身を留める巨大な大仏様がすくっと立っておられるのを思うて地上を見下ろしておられるのだろうか。…（中略）

大半の外国NGOが撤退または活動を休止する中での、国連制裁であり、仏跡破壊問題であった。早魃にあえぐ人々にとって、これがどのように映ったのだろうか。

³ 中村は、「現地の対日感情は非常にいい。自衛隊が派遣されると軍事的存在にしか映らず、これまで築いた信頼関係が崩れる」との懸念を示し、米軍を支援する「日本の軍隊」がNGO活動に悪影響を及ぼし逆効果になるから自衛隊派遣は「有害無益」とまで述べた。（西日本新聞2001年10月14日朝刊）

バーミヤンで半身を留めた大仏を見たとき、何故かいたわしい姿が、一つの啓示を与えたようであった。「本当は誰が私を壊すのか」。その巖の沈黙は、よし無数の岩石塊となり果てても、すべての人間の愚かさを一身に背負って逝こうとする意志である。それが神々しく、騒々しい人の世に超然と、確かな何ものかを指し示しているようでもあった。(2001年4月3日、朝日新聞)

5. 文化相対主義という謙虚

私は1970年代に文化人類学を学んだ。その頃はC.ギアツが先導した象徴と解釈をめぐる人類学が広く人文諸学の関心を集め、私も強く影響された。ギアツの研究の根底にあったのが文化相対主義の立場であった。しかし最近では相対主義が厳しく批判されている。たとえば新実在論を掲げる哲学者のマルクス・ガブリエルは、トランプ前大統領のいう「もうひとつの事実」や「フェイク・ニュース」の拡散など「ポスト真実」と呼ばれる社会状況が生まれ人々に受容されてきた背景には、相対主義と社会構築主義、そしてポスト・モダン理論があると言う。それに対して、人権をはじめ普遍的な価値があり、そこに基づく社会を構想すべきと主張する。たとえば「子どもを拷問していいのか」という問いに対して、答えはNO!が当然だ。同様に「人を殺すな」も道徳的な事実であり、他の選択肢はない⁴。道徳的事象には選択肢など一般的に存在しない、と相対主義（何でもありという類の）を否定する(丸山 2018: 146-153)。

しかし子どもを拷問することが悪であるのは当然としても、いわゆる児童労働については微妙な問題となる。中村はアメリカの侵攻が始まろうとしている直前に、空爆後に予想される事態に対して次のように言い、深い危惧と憂慮の念を示していた。『「自由と民主主義」は今、テロ報復で大規模な殺戮戦を展開しようとしている。おそらく、累々たる罪なき人々

の屍の山を見たとき、夢見の悪い後悔と痛みを覚えるのは、報復者その人である』(『会報』No.69, 2001)。そして実際、空爆後に生じた事態を見据えて、次のようにまとめている。

「タリバーン政権の崩壊は、取り返しのつかぬ無秩序と、人々の苦境を生み出したといえる。解放されたのは、麻薬栽培の自由、餓死の自由、アフガン人が誇りを失う自由である」(『会報』No.71, 2002)。同様なことを別の箇所でも繰り返す。「人権を守るはずであった自由とデモクラシーが混乱を徒に増幅し、人々の生存を脅かしている。タリバーンの『圧制』から女性の権利を解放する筈であった戦いは、物乞いの寡婦たちを激増させ、外国兵相手の売春の自由まで解放してしまった。農村社会と遊牧社会ではごく当然の子供たちの手伝いが、抑圧された『小児労働として、人権侵害の烙印を押された』」(中村 2003a: 107)。

人権侵害とされた子どもたちの労働は、別の見方をすれば親の仕事を手伝い真似しながら知識と技術を習得し、自分が大人になったときに食べていけるようになるための訓練になっている。私がフィリピンでフィールドワークをした西ルソンのアエタ(アジア系ネグリート)社会では、1970年代まで学校はなく親の手伝いが生きるための技術と知恵を学ぶ場であった。それは日本でも、伝統芸能の家元の息子さんが就学前から親に稽古をつけてもらうことに似ている。オリンピックを目指すような子どもならば(多くは両親がそうしたスポーツ選手であった)厳しい練習を毎日のように続けることが当然とされるだろう。ある意味の職業訓練であり成人後の食い扶持の確保のための修行や練習である。それを幼いがゆえに労働であり人権侵害ということに私は躊躇する。中村の異議申し立ては、灌漑プロジェクトの現場で接してきた現地の実情をふまえ、そこで暮らす住民の宗教と文化を尊重し、時に畏敬の念さえ抱いて接し、その声に耳を傾け、応えて

きた経験に深く根ざしている。

そうした姿勢は、実は新実在論を唱えるマルクス・ガブリエルの立場と共通している。ガブリエルは、「道徳的事実は、他人の身になって考えてみた時に分かる類のものだ。あなたが何かしたいことを想像してみてください」と言う(丸山 2018: 153)。

たとえば中村がプロジェクト現場の地域住民の希望に応えようとする姿勢は、用水路の建設と並行してマドラサ(イスラム学校)を建設したことに表れている。マドラサはモスクを併設し、金曜礼拝の時には地域全体の家長らが集まり、大切な知らせを伝えたり問題の対処法を相談したりする。マドラサは地域共同体の中心と言えるもので、イスラム僧を育成するだけでなく、図書館や寮を備え、恵まれない孤児や貧困家庭の子供に教育の機会を与える。それがイスラム過激派を育成する温床になりうるとして西欧諸国は強い警戒感を抱いていたが、中村は現地



モスク・マドラサ全景、手前は用水路。周辺は完全に耕地を回復した。

2010年3月 ペシャワール会提供



用水路の取水堰で油圧シャベルを運転して改修作業をする中村医師。2011年1月。

ペシャワール会提供

⁴ しかし日本社会を振り返ってみると、刑罰としての殺人(死刑)が認められ国家によって執行されてきた。日本に限らず、戦争の際には敵兵を多く殺戮した兵が勲章を受け英雄となる。9.11テロの後にアメリカがアフガニスタンとイラクでした戦争でも同様だった。ガブリエルの主張するように、主体と客体が何であれ(国家が重罪人や敵兵に対してであれ)殺人行為を肯定や容認することはできないと私も思う。

からの強い要望に応え、灌漑工事用の重機と資材があるからと建設を進めた。そして2010年2月にマルワリード用水路とマドラサの2つの事業の完工式を行った。米軍が兵力をもっとも増強して戦闘が激化していた状況下で続けた工事の完遂であった。

6. おわりに

中村医師の活動と信念に導かれながら、相対主義と普遍主義について考えて閉じたい。文化の差異の肯定と寛容（不介入）は人類学の常識であり人類学者の「良心」の証であった。しかしながらそれが膨張して「ジェノサイド」や「レイシズム」その他の容認し難い差別と抑圧の黙認につながることは避けなければならない。

文化相対主義と普遍主義については、畏友の浜本満の議論が示唆に富む。少々古いが今も参考になる。浜本によれば、文化相対主義は一見、普遍主義に対立し正反対の立場に見えるが、実は西洋の普遍主義のいわば双子の弟のようなものである。普遍主義が単一の全体性を夢見て突き進むのに対して、相対主義は自らの世界を相対化することを通じて、他者の世界をひとつのシステムとして眺めることのできる地平を構築しようとする。いずれも他者、すなわち自他の差異に取り憑かれ、自他の差異を包摂するような土台を希求し、狭隘な自文化中心主義への絶えざる懐疑と批判を基本姿勢としている（浜本 1996）。

中村は中学時代にキリスト教の洗礼を受け、葬儀とお別れ会を母校の西南学院大学の教会で行ったクリスチャンでありながら、祖母と父親の儒教的・日本的な道徳観に強く影響され、『論語』が人の当然に守るべきルールを説くものとして身についた。こうした中村の思想、というのが大仰ならば活動と発言の大本には、常に目線の低さ、自身の卑小さに対する感覚、他者や異文化への謙虚さがある。そして確かな実感として文化の違いを超えた人間存在の厳粛さと生の営みの尊さ、それゆえに異文化を生きる他者への共感と畏敬の念とがおのずと生まれてくる。そのことについて、中村は人間存在

の核にある「神聖な空白」という表現を用いて語っている。人は、それぞれ死生観や善悪観をもっており、それは生まれ育った環境と人との出会いをとおして、さまざまに鍛え上げられ、洗練され、あるいは修飾されたり覆われたりしてゆく。そのことを重々承知し、認めたくえで次のように言う。

しかし、極端に異なる文化環境の中でさえも、その核にあるものはそう変わらないというのが私の確信である。後光のさすイエス・キリストが現れようと、蓮の花に囲まれる仏陀が現れようと、精悍なマホメットが現れようと、はたまたそれらを一切否定する「テーゼ」が現れようと、根幹で一致できるなにかを人間は共有している。それらの一致点をなおざりにするところに、優劣の尺度で人を審（さば）いたり、価値観のおしつけが生ずる。

その「一致点」について…現地での体験から確信できるのは、人それぞれに、犯してはならぬ「神聖な空白」とでも呼べるものを共有し、それに自らの生活から滲み出た言葉で意味を与えようとする事である。謙虚さの根源は、この、人の言葉の限界と相対性を自覚することにあると私は思っている。（中村 1993）

まさしく、文化相対主義をふまえつつ、それを超える人間存在に関して通底する普遍的なものに対する信念の吐露である。

—参考文献—

- 中村哲1992 [1989]『ペシャワールにて：癩そしてアフガン難民・増補版』石風社。
 ——1993a『アフガニスタンの診療所から』筑摩書房。
 ——1993b『ガラエ・ヌールへの道：アフガン難民とともに』石風社。
 ——1999『医は国境を越えて』石風社。
 ——2001『医者井戸を掘る：アフガン早魃との闘い』石風社。

- 2003『辺境で診る、辺境から見る』石風社。
 ——2004『空爆と「復興」：アフガン最前線報告』石風社。
 ——2006a『カラー版 アフガニスタンで考える一国際貢献と憲法九条一』岩波ブックレット。
 ——2006b『アフガニスタン・命の水を求めて』石風社。
 ——（編）2006c『丸腰のボランティアすべて現場から学んだ：ペシャワール会日本人ワーカー』石風社。
 ——2013『天、共に在り：アフガニスタン30年の闘い』NHK出版。
 ——2017『アフガン・緑の大地計画：伝統に学ぶ灌漑工法と甦る農業』石風社。
 浜本満1996『文化相対主義の代価』清水昭俊（編）『思想化される周辺世界』（講座文化人類学第12巻）、岩波書店。
 ペシャワール会事務局編2004『ペシャワール会報：1983～2004合本』石風社。
 丸山俊一2018『マルクス・ガブリエル一欲望の時代を哲学する一』NHK出版新書。

〈付記〉

本研究は、2020-21年度関西大学研究拠点形成支援経費において、研究課題「法の支配と法多元主義」（代表・西澤希久男教授）として研究費を受け、その成果を公表するものです。また、事実関係の説明等で、以下の拙稿と重複する部分があります。

- 清水展2007『辺境から中心を撃つ礫：アフガニスタン難民の生存を支援する中村医師とペシャワール会の実践』松本常彦・大島明秀（編）『〈九州〉という思想—九州スタディーズの試み—』花書院。
 清水展2020『中村哲：字義通りのフィールド＝ワーカー』清水展・飯嶋秀治（編）『自前の思想：時代と社会に応答するフィールドワーク』京都大学学術出版会。